

“世紀の大番狂わせだった”と言われるアメリカ大統領選挙の結果を聞いて、昔アメリカで体験した二つのことを思い出しました。

一つはある婦人のおたすけをした時の話です。ある人の紹介で訪れた家であ会った60代の白人婦人。身体はやせ細っているのに両足はパンパンに腫れ上がって太いローソクのような。明らかにガンの末期状態でした。“いのちある限りは！”と“おさづけ”の取り次ぎに通ったもの、数日後にご主人から彼女の出直しの報。どうなぐさめの言葉をかければ……？と悩みながら駆け付けた筆者へのご主人の言葉は、全く思いもよらぬものでした。

「妻が人生の最後に貴方に祈っていただけたのは、本当に素晴らしいことでした。中西部の田舎育ちの彼女は、病気の治療でロサンゼルスに出てくるまでは、白人以外との接触が全くなく、有色人種などは遠くにいる気味悪い存在でしかなかったのです。しかし、そんな彼女が、今わの際に、東洋人の貴方の手で肌をさすって祈ってもらうことを受け入れた。お蔭で彼女は、今度生まれかわった時には、肌の色の違う人への偏見・恐れを持たずに、心豊かな人生を送ることができるでしょう」と言うのです。

“有色人種の存在が欠落していた人生……”などと聞くのは衝撃的でしたが、また、一方で、中西部の保守的なキリスト教徒のはずのご主人から、“生まれかわって云々”の言葉が出たのは、“彼女の魂は救われたと言えるかもしれない”との希望が持てる嬉しいことでした。

筆者は、高校、大学時代をロサンゼルスで過ごし、その間、伝道庁長だった父の巡教時に運転手などをして、全米の40州位は訪れたことがありました。布教師として再度渡米してからは、キリスト教のメソジスト教会や他の個人宅等で開かれている“ヒーリングの会”に毎週招かれて、“おさづけ”の取り次ぎをしたり悩みの相談を受けたりしていました。ドラッグまみれの最貧困層から自宅の庭がヘリポートやプライベートビーチになっているような富裕層まで、宗教家だからこそ可能なあらゆる階層の人との接触がありました。幾人もの有名大学の教授たち、また全米屈指の弁護士事務所や会計事務所の所長らとの付き合いもあり、自分はアメリカのあらゆる人たちを知っているつもりでした。しかし、自分の知らない生活・人生を送っている人が、この国にはまだまだ大勢いる。その時に知ったアメリカの広さ・奥の深さが、この度の大統領選挙の結果にも現われたように思います。

そして、もう一つ思い出したのは、筆者がアメリカに渡った当初に、日系人の一世や二世から度々聞かされた「日本から来た人は……」という言葉です。“日本から（新しく）来た人は、こんなことを言う、こんなことをする”と、何かにつけて言われる。“アメリカの常識・礼儀に外れていて滑稽だ”ということですが、その奥には、“先に渡米した移民の苦労の上に今の日系人の地位・生活がある。新参者がそれに気づかずに能天気な言動をするのはいかがなものか”との含意がありました。

そして、この移民の先輩が新参者を一段低く見る心象風景は、アメリカ中の異なるエスニックグループ間、また同じグループ内の人間関係にも厳然として存在します。たとえば、同じヨーロッパから移住した白人たちの間でも、アイルランド系やイタリア系の人たちは、イギリス系の人たちから一段低く見られてきた歴史があるように、どの地域・国からの移住者でも、後からきた者は

必ず先住者から“新参者”としての洗礼を受けるのです。

アメリカも今は世界一の大国ですが、この国も最初から豊かだったわけではありません。ヨーロッパから東海岸にたどり着いて建国した人たちが、さらに西へ向かって荒野を開拓した。そして、コーン（トウモロコシ）ベルト、ウィート（小麦）ベルト、コットン（綿花）ベルト等と呼ばれる広大な穀倉・綿糸・畜産地帯を、ミシシッピー川流域の大平原に作り上げた。そして、さらに、五大湖岸の石炭、鉄鋼産業や自動車工業、テキサスの油田等の重厚長大産業を発達させた。それでアメリカが世界の超大国になったのです。そして、その強大な国力を基盤にして、金融のウォールストリート、エンターテインメントのブロードウェイやハリウッド、IT産業のシリコンバレー等、東西の海岸地方の産業・文化が次々に花を咲かせたのです。

この度の大統領選挙でのキーワードは、グローバリズム（ヒト・カネ・モノが無制限に国境を越える）と、ポリティカル・コレクトネス（あらゆる差別を排すること）ですが、これは、言い換えれば、どんな新参者でも制限なしに、また平等に、アメリカの産業・文化・生活圏に受け入れるということです。しかし、それでは、アメリカの真ん中に住んでいるサイレント・マジョリティーと言われる人たちの“我々がこの国を偉大にしたのだ”というプライドに傷がつく。先輩のおかげで今日のこの国があるのに、新参者が寄って作り上げた東西の海岸文明だけがアメリカであるかのように言われるのはおもしろくない。そういう気持ちが中西部のウィスコンシン、ミシガン、オハイオ、ペンシルベニアなど幾つかのスイング・ステート（共和・民主両党の支持が拮抗した州）で少し強く現れた。その結果が、“強いアメリカを取り戻す”と叫んだトランプ氏の勝利になったと思うのです。

しかるに、今回の大統領選挙で勝ったトランプ氏の総得票数5,970万票は、負けたクリントン氏が得た票数より200万票も少なく、4年前の選挙で共和党のロムニー候補がオバマ氏に敗れた時の6,090万票より120万票も少ないという事実を見ると、アメリカ全体が右傾化に大きく舵を切ったというのは少し言い過ぎだと思います。今回は、ちょっと新参者にモノ申したいと考えた人たちが、今までとは少し違う投票行動をした。それが、アメリカの特殊な選挙制度（僅差でも勝った方がその州の票を総取りする）のおかげで、トランプ氏勝利の結果にはなった。しかし、それは、アメリカの有権者が挙って国の進路を大転換する決断をしたことを意味するのではないと思うのです。

さらに申せば、生き馬の目を抜くアメリカのビジネス界で成功するには、優れた能力が必要です。未来への洞察力、的確な状況判断と柔軟な対応力、そして、何より、多くの人を魅了する人間力を持っていない限りなりません。トランプ氏もそれらの資質を備えているからこそ不動産王になれたわけで、決して選挙戦での暴言居士のイメージだけの人ではない。“アメリカ第一”とは言うけれども、彼自身は海外にもビジネスを展開している国際派ですから、大統領になれば、それなりに国の内外のバランスを考えた政治をするのではないかとも思うのです。

つまり、アメリカは成熟した民主国家であり、途上国で独裁者が狂気の革命を起こすようなことは起こり得ないだろうと、筆者自身の昔の経験から思っている次第です。